

現代日本語における名詞の非飽和性の研究

| | |
|--------|---|
| 著者 | 羅 漢 |
| 学位授与機関 | Tohoku University |
| 学位授与番号 | 11301甲第19403号 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00129432 |

現代日本語における名詞の非飽和性の研究

東北大学大学院文学研究科 言語科学専攻 国語学研究室

博士課程後期 3 年の課程 羅 漢

目次

第 1 章 序論

1. 本論文の目的
2. 本論文の構成と各章の概要

第 2 章 非飽和性の捉え方の諸問題

1. 非飽和名詞の論理的・操作的定義
2. 先行研究
 - 2.1. 非飽和性を意味論の中で捉える立場
 - 2.2. 非飽和性を語用論の中で捉える立場
 - 2.3. 非飽和性を認知言語学的に捉える立場
3. 問題点
4. 本論文の課題

第 3 章 名詞句「NP1 の NP2」からみる非飽和性

1. はじめに
2. 西山（2003）の名詞句分類
3. NP2 の非飽和性テスト
4. 百科全書的知識による NP2 の解釈
5. 非飽和性に関する NP2 の位置づけ

6. クオリア構造による「NP1 の NP2」の意味分類
7. おわりに

第 4 章 飽和から非飽和への意味拡張とその制約

1. はじめに
2. 飽和名詞と非飽和名詞の多義語について
3. 先行研究とその問題点
4. 類似性に基づく比喩的拡張
5. 飽和名詞と非飽和名詞の多義語のタイプ分け
6. 役割の知識とシステム性原理
7. おわりに

第 5 章 非飽和名詞の飽和化とその生起要因

1. はじめに
2. 非飽和名詞の飽和化について
3. 飽和化の生起要因—その 1
4. 飽和化の生起要因—その 2
5. 飽和化からみる非飽和性の決定要因
6. おわりに

第 6 章 構文的現象からみる非飽和性

1. はじめに
2. 先行研究
 - 2.1. カキ料理構文と非飽和名詞
 - 2.2. 飽和名詞が出現するカキ料理構文について
 - 2.3. 「X を Y に、…する」構文と非飽和名詞
 - 2.4. 飽和名詞が出現する「X を Y に、…する」構文について
3. 分析

- 3.1. 「にとって」の意味からみる両構文の成立条件
- 3.2. 非飽和性の捉え方について
- 4. おわりに

第 7 章 本論文のまとめ

- 1. はじめに
- 2. 各章のまとめ
 - 2.1. 第 1 章のまとめ
 - 2.2. 第 2 章のまとめ
 - 2.3. 第 3 章のまとめ
 - 2.4. 第 4 章のまとめ
 - 2.5. 第 5 章のまとめ
 - 2.6. 第 6 章のまとめ
- 3. 本論文の意義と今後の課題
 - 3.1. 本論文の意義
 - 3.2. 今後の課題

本論文の各章と既発表論文との関係

参考文献

1. はじめに

日本語の名詞には、それ自体で自立的な意味概念を表すタイプと、意味的に自立せず、「～の」といった補足表現を要求するタイプとがある。前者には「鉛筆」「パソコン」のような、物事の属性や種類を表す名詞が入っており、後者には「母」「叔父」「息子」などの親族名詞や「婚約者」「ライバル」「親友」のような関係名詞が代表的である。西山（1990、2003）は、それぞれの名詞のタイプを「飽和名詞」（saturated noun）と「非飽和名詞」（unsaturated noun）と呼んでいる。

例として飽和名詞の「既婚者」と非飽和名詞の「配偶者」を比較してみよう。ある人が既婚者かどうかを判断するには、その人の結婚相手を特定する必要はない。その人が結婚さえしていれば、既婚者のカテゴリーに属すると考えられるからである。このような名詞は、意味的に充足しており、外延（extension）の決定に関して補足表現（complement）を要求しない点で「飽和状態」にあると言えるため、飽和名詞と呼ばれる。一方、ある人に向けて、「あなたは配偶者ですか」と尋ねても、答えることは難しい。その人が配偶者かどうかは、彼（彼女）の結婚相手でありうる人物を特定しない限り定かではないからである。このような名詞は、「誰の／何の」といった意味的な空所を内部に含んでおり、その空所が他の要素によって埋められない限り、それ単独では「非飽和状態」にあると言えるため、非飽和名詞と呼ばれる。

この飽和名詞／非飽和名詞という概念上の区別は、カキ料理構文（「カキ料理は広島が本場だ」構文）をはじめとする様々な言語現象の記述・説明に有用であり、包括的な文法理論にとって不可欠なものであると考えられる（三宅 2000 等）。しかし、両者の区別がどのレベル（言語領域）で規定されるべきかについては、先行研究の間で意見が分かれているようである。西山（2003）を代表とする立場では、ある名詞が飽和名詞か非飽和名詞かということ、すなわち、非飽和性が、文法またはレキシコンにおいて指定されるような意味論的性質であるとされている。一方、大島（2010）の立場では、適切な文脈設定ができれば、飽和名詞と思われるものでも非飽和名詞として用いられる

場合があり、その場合における非飽和性が文脈を含めた語用論の中で決まるとされている。また、氏家（2017）のように、飽和／非飽和の区別を、意味論か語用論のどちらかのみにおいてではなく、両者をはっきりと峻別しない認知言語学の視点から捉えようとする立場もある。

そこで、本論文では、本来飽和名詞であるものが非飽和名詞として用いられる、またその反対の言語現象を分析することにより、名詞の「非飽和性」がどのような影響によって成立するのか、その要因を詳らかにすることを目的とする。

2. 本論文の構成と各章の概要

本論文の目的を達するためには、次の手順を踏まえて考察を進めていく。まず、第1章（序章）で本論文の目的と構成について紹介した後、第2章で名詞の非飽和性の捉え方に関する先行研究を概観し、先行研究における問題点を指摘した上で、本論文の課題を提示する。そして、第3章で飽和名詞がNP2を担う（1）のような名詞句「NP1のNP2」が、なぜ非飽和名詞がNP2を担う場合のそれと類似した意味解釈を持つのか明らかにする。

- (1) 風邪の薬、土鍋の蓋、研究室の窓、自転車のペダル、言語学の入門書、花子のキスマーク、次郎の手、洋子の髪、高層ビルの影、セミの抜け殻、狐の化け物、お寺のパンフレットなど

西山（2003）によれば、（1）のようにNP2が飽和名詞である場合の「NP1のNP2」は、通常、文脈次第で多様な意味に解釈されうるとされる。例えば、「田中さんの本」という名詞句は、文脈次第で「田中さんが所有する本」にも「田中さんが書いた本」にも解釈されうる。しかし、（1）の名詞句は、通常の場合と違って、文脈と関係なく一義的に解釈される。例えば、「風邪の薬」は特殊な文脈を想定しない限り、「風邪を治す薬」という意味にしか解釈されない。このような解釈は、NP2が非飽和名詞の場合のそれと類似している。

このような先行研究の例外現象を観察することで、飽和名詞が非飽和名詞として用いられる要因に迫ることができると考えられる。

続く第4章では、本来は飽和名詞であるが、比喩的に拡張されて使用されるうちに非飽和名詞としての語義を獲得したと思われる、(2)のような多義名詞に着目し、それらが飽和名詞から非飽和名詞へと意味拡張を行われる際に、どのような制約が存在するのかを考察する。

- (2) 武器、舞台、懐刀、試金石、踏み台、モルモット、潤滑油、代名詞、道標、物差し、赤信号、癌、贅肉、骨格、あけぼの、結晶、爪痕、卵など

西山(2003)、山泉(2013)によれば、大多数の名詞は飽和名詞と非飽和名詞のいずれかに属するが、「子ども」のように「児童」(飽和名詞)にも「(誰かの)息子や娘」(非飽和名詞)にも解釈されうる多義的な名詞も量的に限られているものの存在はするとされている。しかし、筆者の調査によれば、(2)のように比喩的な意味拡張(**metaphorical extension**)によって非飽和名詞としての語義を持つに至った多義名詞は数多く存在する。例えば、「武器」という語は、「戦いに用いる種々の器具」を指す場合は飽和名詞であるが、「誰かにとっての有力な手段」を表す場合は非飽和名詞であると考えられる。このような名詞の生成過程を分析することにより、飽和名詞が非飽和名詞として用いられることの一端を垣間見ることができると予測される。

続く第5章では、飽和名詞が非飽和名詞として用いられるのと反対に、非飽和名詞が飽和名詞と同様の振る舞いをする、言わば「非飽和名詞の飽和化」という現象を対象にその生起要因について論じる。

- (3) 「家族を失った人を見るのは辛い。僕も子を持つ父親だから、その気持ちが痛いほどわかる。」と語ったジャッキー

(BCCWJ、Yahoo!ブログ (OY11_00530))

- (4) お前が社長だからといって、まわりの者に対して威張れると思ったら大間違いだ。

(BCCWJ、盛田昭夫他『メイド・イン・ジャパン』(OB3X_00138))

(3) において「父親」は、「誰かの父親」を指すというより、子どもを持つ男性一般のことを表していると思われる。(4) の「社長」も同様に、「どこかの社長」を指すというより、職場の中で最も高い権限を持っている人のことを意味している。つまり、これらの例は、本来非飽和名詞と考えられるものでも飽和名詞と同様に用いられていることを示している。

これまでの研究が問題にしてきたのは、飽和名詞が非飽和名詞として用いられる現象のみであって、上記例のように逆の方向から問題となる「非飽和名詞の飽和化」という現象は取り上げられてこなかった。このような現象を観察することにより、名詞の非飽和性を決定する要因をより包括的に捉えることができると考えられる。

最後の第 6 章では、非飽和名詞に基因すると思われる構文（カキ料理構文と「X を Y に、…する」構文）に飽和名詞が生起するという先行研究の例外現象を対象とし、当該構文において飽和名詞が非飽和名詞として用いられる要因について検討する。

- (5) a. 今の若者は、スマートウォッチが目覚まし時計だ。

(作例)

- b. このロケットは、液体水素が燃料だ。

(作例)

- (6) a. 自分の血をインクに、裸の腹をキャンバスにして、体に単純な象徴を描いたのだ。

(BCCWJ、『ダ・ヴィンチ・コード (上)』(OB6X_00010))

- b. NHK のテキストを教材に会話を習得。

(BCCWJ、『新潟日報』(PN2i_00007))

従来の分析では、これらの構文が構築できるのは、特定の位置にある名詞（下線部名詞）が非飽和名詞の場合のみであるとされている。しかし、(5) (6) の各文は、下線部名詞である「目覚まし時計」「燃料」「インク／キャンバス」「教材」が飽和名詞でありながら、当該構文として成立している。つまり、これらの文における下線部名詞は、本来飽和名詞であるが、当該環境において非飽和名詞として用いられているのである。これらの例外的な文を含め、対象構文の成立を可能にする統一的な条件を考えることで、非飽和性を決定する上でどのような要因があるのかという問題の解決に寄与できると考えられる。

以上のように、本論文は、飽和名詞が非飽和名詞として用いられる、またその反対の言語現象を対象に、(1)～(6)に示されるような現象を分析する。従来における非飽和性の捉え方を再検討し、名詞の非飽和性を影響する意味論的・語用論的な要因を明らかにしていく。

3. 本論文のまとめ

3.1. 第1章のまとめ

第1章では、本論文の導入として、非飽和名詞とその概念規定について紹介し、それを踏まえて本論文の目的や方法を提示した。なお、本論文の目的を達するための課題や各章の概要についても述べた。

3.2. 第2章のまとめ

第2章では、飽和名詞・非飽和名詞の論理的・操作的定義を紹介した後、これまでの研究において、名詞の非飽和性がどのように捉えられてきたかを概観した。先行研究の諸説は、飽和名詞と非飽和名詞の区別を純粹に意味論（言語的知識）の中で捉えるか、語用論（言語外的知識）の中で捉えるか、それとも、両者を連続体と見なし認知言語学的に捉えるかによって3つの立場に大別できる。諸立場の異同について以下の表1にまとめられる。

表 1 非飽和性の捉え方の諸立場の異同

| | 非飽和性が決まるレベル (共通点) | 非飽和性を持つ言語表現 (相違点) |
|------------------------|-----------------------------|----------------------|
| 西山 (1990) | 意味論 (純粋な言語的知識) | ○語レベル、○句レベル |
| 三宅 (2000)、西山 (2012) | | ○語レベル、×句レベル |
| 西山 (2003) | | ○語レベル、△句レベル |
| 山泉 (2013) | | ○語レベル、※句レベル |
| 大島 (2010) | 語用論 (純粋な言語外的知識) | |
| 氏家 (2017) | 意味論と語用論の連続体 (言語的・言語外的知識) | |

そして、いずれの立場にも問題点があり、そのまま踏襲することはできないが、以下の2点について共通の課題として残されていると考えられる。

- (7) a. 飽和名詞であるものが非飽和名詞として用いられる、またその反対の言語現象をどのように説明するのか。
- b. ある語が飽和名詞か非飽和名詞かを決定するには、どのレベル（言語領域）のどのような要因が働いているのか。

(7a) は、飽和名詞と非飽和名詞とが一定の条件下で相互に移行する可能性を問うものである。(7b) は、そのような可能性がある、あるいはないとなれば、どのような理由が考えられるのかを問うものである。両者は表裏一体の関係をなしていると言える。

3.3. 第3章のまとめ

第3章では、一部の飽和名詞が NP2 を担う名詞句「NP1 の NP2」が、非飽

和名詞が NP2 を担う場合のそれと類似した意味解釈を有する、という問題について考察を行った。その結果、1) 対象名詞句の NP2 に相当する名詞が非飽和性テストで飽和名詞と判定されるものの、非飽和名詞とも類似した性格を有すること、2) 対象名詞句の意味解釈がその NP2 にまつわる辞書的知識（言語的知識）と百科全書的知識（言語外的知識）との両方から生じたものであることが明らかとなった。

また、当該の問題を通じて、3) 飽和名詞と非飽和名詞が截然と二分される概念ではなく、段階性を有する連続的な存在であること、4) 名詞の非飽和性を決定するにあたって、純粋な言語的知識のみならず、当該名詞にまつわる百科全書的知識も重要な要因として関与していることが分かった。

なお、対象名詞句「NP1 の NP2」について、百科全書的知識を名詞の言語的知識に取り込んだ語彙表示と目されるクオリア構造 (qualia structure) の観点から適切に分類・記述できることを示した。

3.4. 第4章のまとめ

第4章では、「武器」「舞台」「赤信号」のように飽和名詞と非飽和名詞に関して多義的な名詞を対象に、それらの名詞が飽和から非飽和へと比喩的な意味拡張を行われる際の制約について考察した。

まず、比喩表現約 5000 語をジャンルごとに分類配列した『分類 たとえことば表現辞典』および、筆者の手元にある新聞や書籍を使って比喩的拡張による多義名詞の調査を行った。その結果得られた 140 語の多義名詞を「役割の知識」「構成の知識¹」「変化・発展の知識²」という順に整理すると、以下の表 2 になる。

¹ あるものとそれを構成する部分との関係（材料、材質、内容、～の一部分といった性質）に関する知識。

² あるものとその発生または落着に関する事柄との関係（そのものを生み出す行為や原因、成り立ち、出处、あるいはそのものがたどりつく所、行く先、成長した姿）に関する知識。

表 2 飽和と非飽和の多義語のタイプ分け

| | |
|-------------------------------------|--|
| 役割の知識（98 語） 70% | 赤信号 ⁽⁻⁾ 3、足かせ ⁽⁻⁾ 、障壁 ⁽⁻⁾ 、墓場 ⁽⁻⁾ 、汚点 ⁽⁻⁾ 、致命傷 ⁽⁻⁾ 、不協和音 ⁽⁻⁾ 、青信号、座標軸、引き金、導火線、起爆剤、口火、誘い水、呼び水、嚙矢、受け皿、階段、道、鍵、架け橋、糧、金箱、ドル箱、看板、腰巾着、差し金、試金石、決まり手、四十八手、潤滑油、捨て石、爪牙、代名詞、助け舟、盾、紐帯、蝶番、接ぎ穂、道具立て、狼煙、柱、火元、舞台、懐刀、踏み台、宝庫、防波堤、道標、妙薬、用心棒、坩堝、記念碑、犬、武器、鏡、指針、足がかり、歯車、物差し、実験台、方程式、鋳型、駒、青写真、綾、操り人形、傀儡、椅子、餌食、大掃除、絆、橋頭堡、切り札、金字塔、食べ物、潮時、洗礼、宝、玉手箱、宝石箱、知恵袋、手品、天国、奴隸、縄張り、明星 ^{みょうじょう} 、亡者、分かれ道、リトマス試験紙、レシピ、スパイス、アクセント、ベール、モルモット、ダークホース、メッカ ^(固) 4、黒船 ^(固) |
| 構成の知識（27 語） 19.3% | 癌 ⁽⁻⁾ 、贅肉 ⁽⁻⁾ 、アキレス腱 ⁽⁻⁾ 、礎、骨、骨格、骨組み、餡子、あけぼの、暁、曙光、大綱、眼目、瀬戸際、醍醐味、潮流、渦巻き、辻褄、横綱、尻尾、心臓、オアシス 洪水 ⁽⁻⁾ 、淵 ⁽⁻⁾ 、林、いろは、ABC |
| 変化・発展の知識 （15 語） 10.7% | 芽、卵、泉、揺籃 落とし子、垢、足跡、爪痕、抜け殻、脱皮、置き土産、化石、結晶、権化、二番煎じ |

³ 右肩に⁽⁻⁾が付いた語は、通常の役割ではなく、マイナス的な役割、すなわち妨げを表すものである。例えば、「高血圧は健康の赤信号だ」という文では、「赤信号」の指示対象である「高血圧」が「健康」の妨げになっている。

⁴ 右肩に^(固)が付いた語は、固有名詞である。

表 2 にリストされた多義名詞について詳しく分析すると、次の点を明らかにすることができた。

- (8) a. 非飽和名詞の背後にある意味拡張は、対象レベルの類似性 (object-level similarity) に基づくのではなく、関係レベルの類似性 (relational similarity)、もしくはそれとプラグマティックな類似性 (pragmatic similarity) との両方に基づかなければならない。
- b. 飽和名詞と非飽和名詞の多義語の意味拡張には、各語の意味のベースにある役割の知識、構成の知識および、変化・発展の知識が大きく関与している。
- c. 役割の知識に基づいて拡張された多義名詞が最も多く見られるのは、それらの語が意味の拡張を行われる際に、システム性原理 (systematicity principle) を満たしているからである。

3.5. 第 5 章のまとめ

第 5 章では、一部の非飽和名詞が飽和名詞と同様の振る舞いをする、言わば「非飽和名詞の飽和化」という現象に着目し、その生起要因について考察した。その結果、以下の 2 つの要因が存在することが明らかとなった。

- (9) a. 「代理母」を代表とする一群の非飽和名詞 (表 3) が不特定多数の対象と関連付けられることにより、パラメータにあたるような特定の指示対象とのつながりが弱くなり、単純に職業を表す飽和名詞と理解される。
- b. 「父親」「社長」を代表とする一群の非飽和名詞 (表 4) がその背後にある複数の出来事や性質が世の中にある多数の個体に共通に見られることで、一つのカテゴリーを形成し、パラメータにあたるような独立した概念と関係づけられなくなり、種類を表す飽和名詞と理解される。

表 3 飽和化する非飽和名詞のリストーその 1

| | |
|-----------|--|
| 専門的・技術的職業 | 家庭医、ホームドクターなど 密偵、スパイ、間者、間諜など |
| サービス | 守衛、ガードマン、看守など ボディガードなど 執事、ハウスキーパーなど 代理母、子守、乳母、ベビーシッター など |
| 人物 | 人質、捕虜、俘虜、とりこ、奴隷など |

表 4 飽和化する非飽和名詞のリストーその 2

| | |
|------|---|
| 親・先祖 | 父親、母親など |
| 夫婦 | 奥さん、後添い、後添え、本妻、正妻、 正室、側室、わらわ（妾）など |
| 子・子孫 | 嫡子、嫡出子、嫡男、長子、長男、長 女、末っ子、末娘など 連れ子、養子、養女、落とし子、申し 子など |
| 職位 | 知事、市長、学長、社長、CEO など 教授、プロフェッサー、助手など |

3.6. 第 6 章のまとめ

第 6 章では、非飽和名詞が要件として関わっていると思われる構文（カキ料理構文と「X を Y に、…する」構文）に飽和名詞が出現するという先行研究の例外を指摘した上で、それらの構文を包括的に捉えられる条件を複合助詞「にとって」の意味から記述した。その結果は以下のように示すことができる。

(10) カキ料理構文と「XをYに、…する」構文の成立条件

- a. 指定文「AがBだ」においてBの外延が可變的・相対的なもので、それをAに限定する限られた範囲が「～にとって」によって指定される。
- b. 上が保証された場合、「～にとって、AがBだ」という意味関係が可能になり、当該構文が得られる。

また、上記の成立条件を通じて、対象構文を名詞の非飽和性と関連付けて説明するためには、従来のように非飽和性を純粋な言語的知識、すなわち、意味論のレベルに限定するのではなく、百科全書的知識や文脈を含めた言語外的知識もある程度入れて捉える必要がある、ということを述べた。

4. 本論文の意義と今後の課題

以上、第1章～第6章に至る各章の概略をまとめてきた。以下では、問題点を振り返りながら改めて本論文の意義を述べ、また本論文で論じきれなかったことや今後の課題について述べる。

4.1. 本論文の意義

本論文の意義としては、まず、本論文の全体に関わることとして、純粋な意味論と語用論の連続体として名詞の非飽和性を捉えたことである。名詞の非飽和性の研究には、西山（1990、2003）、三宅（2000）に始まる一定の蓄積がある。一方、坂原（2005）、大鹿（2006）などでも指摘されるように、カキ料理構文をはじめとする言語現象の成立条件を「飽和名詞／非飽和名詞」のように截然と二分される概念によって述べてしまっただけでは、飽和名詞でありながら非飽和名詞として用いられる現象が扱いにくい。これは、飽和名詞と非飽和名詞の区別を純粋に意味論的なものとして捉えるのに限界があるからであろう。本論文は、段階性のある百科全書的知識を非飽和性の概念に取り込むことで、当該の概念の言語現象に対する応用可能性を高めることができた

と考えられる。

また、飽和名詞と非飽和名詞との相互移行の可能性、とりわけ非飽和名詞が一定の条件下で飽和名詞として用いられる可能性について、これまでの研究においてほとんど取り上げられていなかった。しかし、本論文が明らかにしたように、飽和名詞と非飽和名詞とが相互に移行することが可能であり、その移行過程において言語使用者が持つ百科全書的知識が重要な役割を果たしている。名詞の非飽和性の研究を今後さらに発展させていくためには、非飽和性と辞書的知識の関係にとどまらず、語にまつわる百科全書的知識や発話状況といった観点からの分析が欠かせない。本研究の成果により、今後、名詞および名詞句の研究に対し、このような非飽和性の捉え方を応用しうる可能性が示されたと言える。

4.2. 今後の課題

前節までは、本論文の各章の概要と本研究の意義について述べてきた。以下、本研究で論じきれなかった主な課題について言及する。

- (a) 日本語以外の言語を対象とする非飽和性の研究
- (b) 飽和名詞と非飽和名詞の相互移行の要因や制限
- (c) 非飽和性の名詞句以外の言語単位への適用可能性

(a) に関して、日本語を対象とする非飽和性の研究については、既に様々な知見が蓄積されているが、山泉（2013）などで指摘されるように、日本語以外では非飽和性の研究がほとんどなされていないようである。他の言語においては、飽和／非飽和の区別が存在しなくても不思議ではないし、「作曲家」と「作曲者」のように飽和と非飽和だけで意味が対立している名詞のペアの存在も必然的ではない。また、筆者の観察によれば、中国語や英語にも飽和／非飽和の区別が存在するが、それらの言語における両者の区別も日本語と同様に決定されるとは限らない。これらの課題については、今後の研究に委

ねたい。

(b) に関して、第 4 章・第 5 章のように、百科全書的知識や文脈環境が名詞の非飽和性の決定に影響を与えることがあるということは、これまで言及されなかった。飽和名詞と非飽和名詞の相互移行の要因を考える際に、言語外的知識との影響関係を考えるという新しい視点を与えることができたと言えよう。そのため、言語外的知識に由来する非飽和性についてさらに考察を深めることが必要であると考え。

(c) に関して、非飽和性の概念を名詞または名詞句以外の言語単位にも適用できるかどうかについては、本論文中では明らかにすることができなかった。例えば、井門（2017）などで指摘された「買い物難民」「ネットカフェ難民」のような「～難民」や、「戦争ポルノ」「フードポルノ」「愛国ポルノ」のような「～ポルノ」といった新造語・複合語の内部関係についても非飽和性という概念を用いて記述・説明できるか、今後さらに検討が必要である。

参考文献

- 井門 亮（2017）「第 5 章 多義語の分析と語用論」中野弘三（編）『語はなぜ多義になるのかーコンテキストの作用を考えるー』朝倉書店。
- 氏家啓吾（2017）「「地図をたよりに」構文と非飽和名詞」『東京大学言語学論集』38、287-301.
- 大鹿薫久（2006）「<書評>西山佑司著『日本語名詞句の意味論と語用論ー指示的名詞句と非指示的名詞句』」『日本語文法』6（1）、130-138.
- 大島資生（2010）『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房.
- 坂原 茂（2005）「<書評>西山佑司著『日本語名詞句の意味論と語用論ー指示的名詞句と非指示的名詞句』」『日本語の研究』1（2）、98-104.
- 中村 明（2014）『分類 たとえことば表現辞典』東京堂出版.
- 西山佑司（1990）「「カキ料理は広島が本場だ」構文についてー飽和名詞句と非飽和名詞句ー」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22、169-188.
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論ー指示的名詞句と非指示的

名詞句一』ひつじ書房.

西山佑司 (2012) 「第 4 章 語や句の曖昧性はどこからくるか」今井邦彦・西

山佑司 (著) 『ことばの意味とはなんだろう』岩波書店、89-143.

三宅知宏 (2000) 「名詞の「飽和性」について」『国文鶴見』35、89-79.

山泉 実 (2013) 「非飽和名詞とそのパラメータの値」西山佑司 (編) 『名詞

句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房、11-27.

Getner, Dedre (1983) Structure mapping: A theoretical framework for analogy.

Cognitive Science Vol. 7, 155-170.